

近江商人吉村儀兵衛家の出店経営

Management of the Branch Stores of the Yoshimura Family
of Omi merchants

上 村 雅 洋
Uemura, Masahiro

ABSTRACT

The Yoshimura family was a family of Omi merchants who created Odani-mura in the Omi headquarters. The Yoshimura family established a network of stores around their central store during the Edo Period, in Shimozuma, Washinosu, Onna, Sakai, Kakizaki, Yokobori, Shimodate, and the Kanto district, and engaged in brewing. This paper compares management trends at these stores, using account books and other historical records.

はじめに

吉村儀兵衛家は、多くの日野商人と同様に関東地域において酒造業を営み、経営規模を拡大していった近江商人であった。同家は、近江国蒲生郡小谷村を本拠地とし、下野国芳賀郡谷田貝（久下田）において酒造業を営み、その本店（久下田店）周辺の下野国・常陸国に多くの出店を設け活動していた。これまで吉村儀兵衛家については、関東での酒造業展開の概観⁽¹⁾、雇用形態⁽²⁾、本店である久下田店の経営動向⁽³⁾を明らかにしてきた。特に、本店（久下田店）の経営動向

（１）拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」（安藤精一・高嶋雅明・天野雅敏編『近世近代の社会と経済』清文堂出版，2009年）。

（２）拙稿「近江商人吉村儀兵衛家の雇用形態」（１）（２）（和歌山大学『経済理論』第353号・第356号，2010年）。ほかに吉村家については、二宮町史編さん委員会編『二宮町史』通史編Ⅱ 近世（二宮町，2008年）に詳しい。

を分析した前稿においては、吉村儀兵衛家の資本蓄積の動向を近代に至るまで長期的に把握しようとした。

そこで、本稿ではこうした本店の動向と比較しながら周辺出店の規模、資産の推移について、分析することによって、出店の経営動向を含めた吉村儀兵衛家の経営のあり方について考えようとした。吉村儀兵衛家の出店については、「一九世紀になると吉村家は、久下田店のほかに、鷺巣店（長沼）・柿岡店（茨城県石岡市）・横堀店（大平町）・恩名店（茨城県古河市）・下妻店（茨城県下妻市）などの支店を構え、それぞれの支店に天満屋惣右衛門・天満屋三郎兵衛・天満屋儀三郎・天満屋与三郎・天満屋与三右衛門といった代表者を置いている⁽⁴⁾」とあり、本店の天満屋儀右衛門以外に、それぞれの支店に店名前が付けられ、経営がなされていたことがわかっている。本稿では、これらの出店を中心に残された各年の出店ごとの「造酒諸勘定目録」「勘定帳」などの帳簿史料を中心に、それぞれの出店の経営動向を具体的に分析することによって、各出店の規模や性格を考えてみることにする。

1 下妻店

まず吉村儀兵衛家の出店として、比較的古い時期に設けられた下妻店を見てみよう。下妻店は、常陸国真壁郡下妻西町にあり、「下妻蔵」「天与」とも称され、店名前は「天満屋与三右衛門」であった。下妻店は、明和8年（1771）9月の「卯秋造酒諸勘定帳」⁽⁵⁾によれば、「下妻天満屋酒蔵西ノ秋分造酒始り」とあり、明和2年に開業したことがわかる。

そこで、この開店した年から天明2年（1782）までの17年間の下妻店の経営

✓（3）拙稿「近江商人吉村儀兵衛家の経営—本店を中心に—」（和歌山大学『研究年報』第14号 経済学部創立60周年記念号，2010年）。

（4）前掲『二宮町史』通史編Ⅱ，437頁。

（5）明和8年9月「卯秋造酒諸勘定帳」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）。この史料は「卯九月吉日」とのみ記されているが、内容から明和8年と判断した。他にも、寛政10年正月「日記」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）にも「明和式西，下妻蔵始」とある。

表 1 下妻店の資産額

年 代	元 金	造酒米高	利 金	売 上 高
明和 3 年(1766)	319 両・2 貫 776 文	410 石	41 両 2 分・251 文	635 両 1 分・667 文
明和 4 年(1767)	390 両・724 文	358 石 3 斗	42 両・762 文	479 両 1 分・332 文
明和 5 年(1768)	444 両・3 貫 222 文	373 石	22 両 3 分	441 両 2 分・930 文
明和 6 年(1769)	407 両 850 文	303 石 7 斗	7 両 672 文	392 両 3 分・840 文
明和 7 年(1770)	440 両・2 貫 37 文	305 石 7 斗 3 升 7 合	729 文	425 両 3 分・85 文
明和 8 年(1771)	435 両 3 分・2 貫 300 文	280 石 4 斗	79 両 2 分・456 文	360 両 1 分・962 文
安永元年(1772)	465 両・2 貫 110 文	米凡 300 石	25 両・4 貫 464 文	凡 470 両
安永 2 年(1773)	430 両 2 分・250 文	275 石 2 斗	144 両 1 分・1 貫 216 文	448 両
安永 3 年(1774)	437 両 1 分・1 貫 120 文	337 石 8 斗	78 両 1 分・85 文	448 両 917 文
安永 4 年(1775)	456 両・1 貫 485 文	283 石 7 斗 5 升	115 両 2 分・1 貫 283 文	469 両 686 文
安永 5 年(1776)	582 両 1 分・1 貫 44 文	356 石 2 斗	65 両 1 分・542 文	509 両 2 分・135 文
安永 6 年(1777)	521 両・288 文	322 石 9 斗	40 両 2 分・206 文	571 両・531 文
安永 7 年(1778)	541 両 3 分・424 文	465 石 6 斗	51 両 2 分・1 貫 214 文	631 両・372 文
安永 8 年(1779)	533 両 3 分 2 朱・90 文	436 石 2 斗	50 両・437 文	607 両 2 朱・76 文
安永 9 年(1780)	533 両 2 分 2 朱・1 貫 511 文	372 石 2 斗	31 両 3 分・514 文	540 両
天明元年(1781)	494 両 1 分 2 朱・227 文	441 石 4 斗 6 升	53 両 1 分・14 文	604 両 3 分・342 文
天明 2 年(1782)	520 両・241 文	402 石 4 升	72 両・689 文	650 両 980 文

(注) 天明 2 年 12 月「万目録」(日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書)より作成。

動向を天明 2 年 12 月の「万目録」⁽⁶⁾によって見てみよう。それを表に示したのが、表 1 である。明和 3 年とあるのは、「酉秋始戌秋勘定」とあるように、開業年の明和 2 年の秋から翌 3 年の秋までの勘定を示している。

この表によれば、元金は明和 3 年には 319 両・2 貫 776 文であり、同 4 年には 390 両余となり、その後は 400 両台を保つ。安永 5 年には 582 両余となり、その後はほぼ 500 両台を維持している。造酒米高は、明和 3 年には 410 石であり、その後は 300～450 石前後を上下しているが、安永 7 年(1778)以降はほぼ 400 石を超えている。利金は、明和 3 年には 41 両 2 分・251 文であり、最も少ないのは明和 7 年の 723 文で、最高は安永 2 年の 144 両 1 分・1 貫 216 文であったが、毎年 50 両前後を得ている。売上高は、ほぼ造酒米高と連動しており、500～600 両前後であり、安永 7 年以降はほぼ 600 両を超えている。⁽⁷⁾

この「万目録」は、本店で述べたと同様に、天明 2 年の時点でこれらの勘定を明和 3 年～安永 5 年の 11 年間と、安永 6 年～天明 2 年の 6 年間に分けて分

(6) 天明 2 年 12 月「万目録」(日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書)。

(7) 「万目録」では、この 17 年間の平均も計算しており、それによれば元金は 469 両余、造酒米高は 354 石 4 斗余(代金 309 両 2 分余)、利金は 48 両 3 分余、売上高は 511 両 1 分余とある。

析している。前者の年平均の元金は439両余、造酒米高は325石8斗7升、利金は48両1分・926文、売上高は461両3分余であるのに対し、後者の年平均の元金は524両余、造酒米高は406石7斗9升、利金は49両3分余、売上高は600両1分とあり、後者の方が少し増加しており、下妻店の経営が順調に展開していたことをうかがわせる。その後の下妻店の動向については、現在のところほとんど明らかにできない。⁽⁸⁾

同様に安永2年～天明2年における、本店（久下田店）の年平均の元金は703両3分、造酒米高は541石6升、利金は102両、売上高は423両2分であったことから、この時期の下妻店の規模は、本店よりやや小さめの店であったことがわかる。⁽⁹⁾

2 上ノ店

上ノ店は、寛政5年（1793）に新規株として、元来下野国那須郡小川村の重郎右衛門が所有していた酒造株を下野国芳賀郡谷田貝町の名主鈴木五郎兵衛の手を経て、儀右衛門へ譲り渡されて開設されたものであり、吉村儀兵衛家は店舗数を拡大することで、酒造増石を図ろうとした。⁽¹⁰⁾ この酒造株は、文政13年（1830）12月の「造酒一条写」では、元株高30石として書き上げられ、弟の庄助⁽¹¹⁾（伊右衛門）⁽¹²⁾が酒造稼人となっていた。

上ノ店は、「上之蔵」「角天店」などとも称され、店名前は「天満屋儀兵衛」であっ

（8）下妻店については、ほかに安永8年2月の小谷村儀兵衛と常州下妻西町の与三右衛門宛の奉公人請状の雛形が残されている（安永8年2月「奉公人請状之事」日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）。また、「店内仕法之事」（同）にも「久下田下妻本店 支配人」とある。下妻市史編さん委員会編『下妻市史』中（下妻市，1994年，374～375頁）では、安政7年の下妻町の酒造家として「城廻村西町の天満屋（猪瀬）与三右衛門」（造酒米高900石）を掲げ、「安永2年（1773）に農間渡世として酒造業を始め、さらに質屋も営んだ」とあり、店名前は下妻店と一致するが、同一の店か確認できない。

（9）前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家の経営一本店を中心に」420～421頁。

（10）前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」207～208頁。

（11）文政13年12月「造酒一条写」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）。

た。上ノ店は、久下田（谷田貝）上町⁽¹³⁾に所在し、本店の久下田店（天満屋儀右衛門）の枝店的存在であった。安政3年（1856）までは「天満屋儀兵衛」として吉村儀兵衛家の弟・悖の家族の店として存在していたようである。しかし、「安政四巳年より上ノ店四分六分割合、改名扇屋彦右衛門⁽¹⁴⁾」とあり、安政4年から店名前を「扇屋彦右衛門」とし、その利益を分割したようである。すなわち、安政4年「巳穰勘目録⁽¹⁵⁾」によれば、同年の益金118両1分・365文の「此四分割」である47両・永322文2分8厘を「本店分わり」とし、「此六分割」である70両・永983文4分2厘を「上ノ店方わり」とするものであった。

扇屋彦右衛門の名前は、その後の帳簿にも記載され、明治3年（1870）まで帳簿にその名が見える。しかし、明治4年には「扇屋彦平」となり、同5年からは「扇屋彦市郎」「扇屋彦市良」となる。そして、明治9年からは「邑田彦市郎」「村田彦一郎」となり、明治22年と23年には「村田彦右衛門」の名前となっている⁽¹⁶⁾。

そこで、吉村儀兵衛家に残された上ノ店関係の各年の「酒醬油諸勘定目録」「勘定帳」などの帳簿を整理して示したのが、表2である。ここでも、本店と同様に各年の勘定帳には春勘定と秋勘定が記載されている場合も見られたが、秋勘定を優先させて取り上げた。秋勘定が得られない場合は、春勘定などで代替した。

✓ (12) 文政13年には悖の「庄助」が、3代目儀右衛門（44歳）を相続し、弟の伊右衛門（47歳）が、庄助として上ノ店を経営したものと思われる（前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家の雇用形態」（1）128～129頁）。

(13) 天保2年正月「勘定帳」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）には、「野州久下田上町」とあり、本店の久下田店が中町にあることから、この店を区別して上ノ店と呼んだのかも知れない。

(14) 安政3年「辰ノ春勘定目録」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）。

(15) 安政4年「巳穰勘目録」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）。

(16) 村田彦右衛門は、滋賀県蒲生郡市原村一式出身の村田久吉が襲名し、扇屋村田酒造として引き継いでいったようである。同酒造の主要銘柄は、「勝菊」で、昭和末頃には酒造業から撤退した。扇屋村田酒造については、徳田浩淳『栃木酒のあゆみ』（栃木県酒造組合、1961年）809～810頁、二宮町史編さん委員会編『二宮町史』通史Ⅲ 近現代（二宮町、2008年）269～270頁参照。

表2 上ノ店の資産額

年 代	資 産 額	元 金	造酒米高	醤油諸味売高
文政12年 (1829)	667 両 1 分 1 朱・245 文	892 両 2 分 3 朱・2 貫 829 文	271 石 8 斗 8 升	56 石
天保元年 (1830)	1191 両 1 分・1 貫 123 文	1208 両 2 分 2 朱・112 文	407 石 9 斗 2 升 2 合	94 石 6 斗
天保2年 (1831)	1404 両 3 分 3 朱・53 文	1349 両 2 分 1 朱・7 貫 687 文	376 石 7 斗 4 升	104 石
天保3年 (1832)	1400 両 3 分 2 朱・183 文	1443 両 3 朱・84 文	374 石 1 斗	115 石
天保4年 (1833)	1479 両 3 朱・1 貫 594 文	1392 両 2 分 3 朱・12 貫 457 文	301 石 7 斗 7 升	115 石
天保5年 (1834)	1751 両 2 分 2 朱・336 文	1183 両 1 分・4 貫 501 文	318 石 5 斗 5 升	110 石
天保7年 (1836)	1819 両 3 分 1 朱・360 文	1172 両 3 分 2 朱・1 貫 628 文	262 石 2 斗 3 升 3 合	75 石
天保8年 (1837)	1787 両 1 分 3 朱・740 文	1777 両 2 分 2 朱・2 貫 236 文		90 石
天保11年 (1840)	843 両 2 分 1 朱・274 文	300 両	350 石 7 斗	100 石
天保13年 (1842)	916 両・863 文	300 両	351 石 9 斗 3 升	57 石
天保14年 (1843)	840 両 1 分・1 貫 83 文	300 両	338 石 8 斗 4 升	190 石
弘化2年 (1845)	1491 両 3 分 2 朱・751 文	600 両	94 石 5 斗	80 石
弘化3年 (1846)	1586 両 2 分・1 貫 177 文	600 両	212 石 1 斗 6 升	137 石
弘化4年 (1847)	1761 両 3 分・1 貫 672 文	600 両	402 石 7 斗 6 升	52 石
嘉永元年 (1848)	1845 両・934 文	600 両	384 石 2 斗 1 升	39 石
嘉永2年 (1849)	1976 両・1 貫 644 文	600 両	348 石 9 斗 1 升	64 石
嘉永3年 (1850)	1985 両・1 貫 949 文	600 両	306 石 4 斗 8 升	175 石
嘉永4年 (1851)	2061 両 2 分・791 文	600 両	253 石 1 斗 1 升	178 石
嘉永5年 (1852)	2171 両・1 貫 800 文	600 両	400 石 2 斗 6 升	140 石
嘉永6年 (1853)	2303 両・1 貫 186 文	600 両	351 石 2 斗 8 升	98 石
安政元年 (1854)	2326 両 3 分 2 朱・554 文	600 両	231 石 4 升	92 石
安政2年 (1855)	2567 両・8 貫 476 文	600 両	375 石 2 斗 5 升	70 石
安政3年 (1856)	2614 両 1 分・1 貫 701 文	600 両	298 石 6 斗 8 升	36 石
安政4年 (1857)	564 両 2 分・1 貫 25 文	300 両	210 石 8 斗 4 分	99 石 5 斗
安政5年 (1858)	592 両 2 分・406 文	300 両	227 石 5 斗 7 升	75 石
安政6年 (1859)	516 両 2 分 3 朱・116 文	300 両	210 石 7 斗	74 石
万延元年 (1860)	675 両 1 分 1 朱・67 貫 751 文	300 両	182 石 2 斗	75 石
文久元年 (1861)	734 両 3 分・61 文	300 両	219 石 8 斗 6 升	68 石
文久2年 (1862)	850 両 1 分・70 文	300 両	265 石 2 斗 9 升	90 石
文久3年 (1863)	890 両 2 分・1 貫 444 文	300 両	284 石 2 斗	90 石
元治元年 (1864)	1213 両 1 分 2 朱・668 文	300 両	348 石 7 斗 7 升	90 石
慶応元年 (1865)	1596 両 3 分・1 貫 514 文	300 両	385 石 8 斗 4 升	95 石
慶応2年 (1866)	2114 両 3 分・742 文	300 両	293 石 1 升 5 合	65 石
慶応3年 (1867)	3081 両 3 分・816 文	300 両	222 石 2 斗	70 石
明治元年 (1868)	3764 両 2 分・359 文	300 両	417 石 2 斗 2 升	85 石
明治2年 (1869)	4161 両 2 分・1 貫 88 文	300 両	364 石 7 斗 8 升	
明治3年 (1870)	3819 両 1 分・2 貫 413 文	300 両	203 石 2 斗 1 升	
明治4年 (1871)	3609 両 2 分 2 朱・674 文	300 両	415 石 7 斗 9 升 5 合	
明治5年 (1872)	3665 両 1 分・374 文	300 両	539 石 9 斗	
明治8年 (1875)	3484 両 1 分・119 文	300 両	301 石 4 斗 8 升	
明治9年 (1876)	4023 両・274 文	300 両	355 石 9 斗 6 升	
明治10年 (1877)	3329 円・1 貫 497 文	300 円	320 石 1 斗	
明治11年 (1878)	4368 円 35 銭 4 厘 1 毛	300 円	400 石 1 斗 7 升	
明治12年 (1879)	5098 円 61 銭 5 厘 1 毛	300 円	383 石 6 斗 4 升 5 合	
明治16年 (1883)	5168 円 29 銭 2 厘 9 毛	300 円	372 石 8 斗	
明治17年 (1884)	6224 円 5 銭 5 毛	300 円	255 石 6 斗 4 升 1 合	
明治22年 (1889)	4996 円 55 銭 8 厘 5 毛	300 円	338 石 1 斗 1 升	
明治23年 (1890)	5700 円 32 銭	300 円	212 石 4 斗	

(注) 各年の「酒醤油諸勘定目録」「諸勘定目録」「勘定帳」など(日野町史編さん室・栃木県立文書館寄託古村儀兵衛家文書)より作成。

この表からは、文政12年から明治23年にいたる上ノ店の資産額などの状況が明らかになる。ただし、その間の天保期の5年分、明治期の8年分のデータが欠けている。この表によって、各データの推移を見てみよう。資産額は、文政12年には667両1分1朱・245文であったが、翌年の天保元年（1830）には1191両1分1朱・1貫123文に急増している。この理由は不明であるが、その後の推移からすると、文政12年のデータが全体的に少し低く評価されているのかもしれない。その後は順調に増加し、天保7年には1819両余にまで達し、同8年も1787両余とその水準をほぼ維持するが、同11～14年には1000両を割り込む。そして、前稿で述べたように、天保15年正月には上ノ店が火事に見舞われ、質蔵を残して、酒蔵、醤油蔵、穀蔵諸道具が焼失した。そのため、弘化元年（1844）はデータが欠けている。しかし、弘化2年には1491両余となり、その後は年に50～100両程度順調に増加し、安政3年には2614両余に達する。ところが本店と同様に、家政改革による会計上の処理によるものの、翌4年には564両余と急激な落ち込みを見せる。その後少し低迷するものの、万延元年（1860）からは増加に転じ、明治2年には4161両余となる。明治10年までは4000両（円）前後で停滞するが、同17年には6224円余、同23年には5700円余となる。こうした資産額からすれば、江戸期の上ノ店は本店の1～2割の規模であったことがわかる。

元金は、「本店の元金」「本店の元手金」「本店元金」「本店預り」「本店居り金」などとあり、本店である久下田店からの出資金にあたるものと思われる。元金の推移をみると、文政12年には892両2分3朱・2貫829文であったが、資産額と同様に増加し、天保8年には1777両余に増加する。天保11年からは、定額の本店からの元金が計上され、300両とされたようである。前述したように資産額もこの年に急減しており、何らかの会計上の処理がなされたかもしれない。弘化2年からは、倍額の600両となり、これが安政3年まで続く。しかし安政4年になると、資産額の落ち込みと同様に元金も300両に減額され、こ

(17) 前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家の経営—本店を中心に—」424～425頁。

れが幕末期まで続いていく。さらに明治10年には円勘定に変わるものの、明治期に入っても300両(300円)としており、同23年に至っても同じく300円と固定されたままである。ただし、定額の「本店金元金」とは別に、たとえば天保11年には「本店金当借用」として163両1分・43貫901文があり、弘化4年には867両2朱・704文、安政3年には1548両2分1朱・66文、同4年には96両、文久2年(1862)には133両余、元治元年には52両余が「本店金当借用」として引き続き計上された。

質方有物は、文政12年には175両3分3朱・119貫41文であり、その後増加し、天保5年には334両1分・166貫911文、同8年には362両1分3朱・284貫875文となっている。しかし、天保11年に「有質メ」として39両2朱・32貫233文に激減し、弘化2年には7両2分2朱・8貫632文にまで落ち込み、同3年から安政3年まではわずか3両3分2朱・4貫988文と同じ額であった。しかも、安政4年以降は質方有物が計上されておらず、天保15年の火災で質蔵は残ったものの、それを機に質屋業を取りやめた可能性がある。

上ノ店は、酒造業以外に醤油醸造も行っており、そのための塩・大豆・小麦・大麦などの原材料も書き上げられている。醤油諸味売高としては、文政12年には56石であったが、天保元年には94石6斗となり、その後はほぼ年々100石前後が書き上げられ、嘉永4年(1851)には178石にまで及んだが、同6年以降は100石以下であった。しかも、明治2年以降は醤油諸味が計上されず、醤油業を廃業したようである。⁽¹⁸⁾

造酒米高は、文政12年には271石8斗8升であったが、天保元年には407石余にまで増加するが、その後350石前後を推移する。しかし、弘化2年には94石5斗にまで落ち込むが、これは前述したように前年の上ノ店の類焼による影響と思われる。弘化3年になると212石余に持ち直し、250～350石を上下しながら、明治5年には539石と増加する。しかし、その後は250～400石

(18) 明治7年4月「取調書上」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)でも、「醤油造人」5軒の中に吉村家は含まれていない。

の規模で推移する。

3 鷺巣店

鷺巣店は、文政7年に下野国芳賀郡鷺巣村の伝兵衛の土地に建てられていた古河町の大津屋庄右衛門の酒蔵・土蔵・酒道具を譲り受けて、酒造業を始めたようであるが、表2に見られるように文政4年からの勘定帳が残されており、実際にはそれより少し前に鷺巣店が開かれ、酒造経営がなされていたようである。

鷺巣店は、「鷺巣蔵」「角天惣」などとも称され、店名前は「天満屋惣右衛門」であった。⁽²⁰⁾

そこで、各年の鷺巣店の「造酒勘定目録」などの勘定帳を用いて、資産額などの数値を示したのが、表3である。この表によれば、鷺巣店の資産額は、文政4年には492両2分・867文であり、同6年には766両余となる。文政10

表3 鷺巣店の資産額

年 代	資 産 額	元 金	質 方 有 物	造酒米高
文政4年(1821)	492両2分・867文	130両・73文	33両3分2朱・61貫342文	353石1斗8升
文政5年(1822)	482両・22文	130両	104両3分・115貫881文	324石1斗4升
文政6年(1823)	766両1分・290文	130両・73文	163両3分2朱・167貫6文	391石6斗
文政7年(1824)	820両2分2朱・603文	130両・73文	278両・259貫618文	317石9斗7升
文政10年(1827)	1311両3分3朱・253文	130両・73文	431両1分2朱・389貫131文	330石7斗
文政11年(1828)	1420両1分2朱・1貫411文	192両1分2朱・20文	445両1朱・327貫168文	351石6斗6升
文政12年(1829)	1348両3朱・104文	249両1分・554文	414両1分1朱・309貫440文	363石3斗
天保元年(1830)	1339両3分2朱・327文	341両2分1朱・630文	338両・264貫992文	413石6斗3升
天保2年(1831)	1499両2朱・335文	371両3分2朱・842文	454両1分3朱・357貫45文	405石1斗7升
天保3年(1832)	1577両1分・1貫188文	381両1分・275文	497両2分・421貫469文	325石6斗9升
天保4年(1833)	1652両・105文	381両2分2朱・1貫51文	463両3分1朱・480貫961文	320石8斗9升
天保5年(1834)	1600両1分2朱・121文	430両2分2朱・1貫665文	411両1分・552貫788文	202石2斗
天保6年(1835)	1685両1分2朱・615文	460両・2貫67文	443両3分2朱・408貫35文	278石8斗7升
天保7年(1836)	1698両・9文	497両1分・2貫476文	536両・411貫410文	260石7斗1升
天保10年(1839)	1842両1分2朱・50文	614両1分3朱・520文	498両1分・307貫813文	203石5斗6升
弘化2年(1845)	1610両3分2朱・370文	121両1朱・1貫686文	488両1分2朱・493貫14文	208石7斗3升
弘化3年(1846)	1741両・63文	8両1分2朱・228文	489両2分・447貫961文	174石8斗2升
弘化4年(1847)	1737両・3貫554文	8両1分2朱・222分	428両3分2朱・460貫477文	162石
嘉永3年(1850)	1986両1分2朱・3貫638文	35両2朱・346文	577両3分・530貫779文	

(注) 各年の「造酒勘定目録」「勘定目録帳」「勘定帳」など(日野町史編さん室・栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)より作成。

(19) 前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」208～210頁。

(20) 惣右衛門(宗右衛門)は、天保14年(28歳)～慶応3年(52歳)における儀右衛門の弟の名前として存在している(各年の「御宗旨人別書」栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)とことから、それを店名前に用いたのかも知れない。

年には1311両余であり、その後順調に増加し、嘉永3年には1986両1分2朱・3貫638文に達する。天保5年正月の「日下栄」⁽²¹⁾によれば、鷺巣店に勤務していた益田村の勇蔵が「鷺巣之店年々不勘定ニ付、嘉永四十月引払申候、依而勇蔵本店勤相成申候」とあり、業績不振で嘉永4年10月に店を閉じたようである。資産額から見ると、上ノ店とほぼ同規模のものであったといえる。

元金は、文政4年には130両・73文であり、「当店元金」と記され、同10年まで130両余と一定であった。しかし、文政11年からはそれが変動し、天保10年の614両余まで資産額と同様に増加する。弘化2年以降は極端に落ち込む⁽²²⁾。

質方有物は、文政4年には33両3分2朱・61貫342文であったが、同5年には104両余、同7年には278両余、同10年には431両余と増加する。その後は、ほぼ400両台を維持し、嘉永3年には577両3分・530貫779文に至る。

以上は勘定帳から見た質方の動向であるが、鷺巣店の質方稼ぎについては、次に示すようにそれ以前から行なわれていたようである。

御糺ニ付奉申上候書付⁽²³⁾

拾ヶ年以前文政二卯年より渡世仕候	大草次郎知行所
酉戌質取高式ヶ年分平均壺ヶ年分	下野国芳賀郡鷺巣村
一金六百六拾七両壺分式朱	百姓ニ而
錢八百九拾三貫五百文	質屋 惣右衛門
金壺両ニ付利足百拾六文	
但錢百文ニ付利足式文	
金拾五両ニ付利足壺分	

右者農業之間質屋渡世之もの私共之外壺人茂無御座候、右御糺ニ付此段奉申上候、以上

(21) 天保5年正月「日下栄」(日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書)。

(22) 弘化2年以降の勘定帳には、ここで示した前年の「元金」以外に、「国元」「国元金」などとして500両、「本店」「本店居直り金」などとして300両が計上されている。

(23) 文政12年6月「御糺ニ付奉申上候書付」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)。

文政十二丑年六月

右村

百姓二而

質屋 惣右衛門[㊦]

名主 利右衛門

関東御取締御出役

山田茂左衛門様御手代

原 戸一郎殿

平山逢吉殿

山本大膳様御手代

堀江与四郎殿

すなわち、文政2年から鷺巣村で農間余業として質屋稼ぎを行なっていたようであり、文政8～9年の質取高の平均は1年に667両1分2朱・893貫500文であったという。同時期の本店（久下田店）の質取高の平均は1年に2176両2分1朱・1567貫643文であり、鷺巣店の質屋の規模は本店の3分の1程度であったことがわかる。

さらに、天保6年12月には領主からの質物に関する問い合わせに対し、「野州芳賀郡鷺巣村名主伝兵衛地借質物渡世惣右衛門奉申上候」「此段私儀無之百姓二而農間質御渡世仕罷在候」として、衣類持参の質入があったことを報告⁽²⁴⁾している。また、天保4年6月の「乍恐以書付奉申上候」⁽²⁵⁾でも久下田店のことだけでなく、「同州同郡之内鷺之巣村出店壺ヶ所、是ハ当時酒商質物仕候」⁽²⁶⁾とあり、酒造業と質方稼ぎを行なっていたことが確認できる。

造酒米高は、文政4年には353石1斗8升であり、その後300石台を上下しながら天保元年には413石余にまで達する。しかし、天保期以降は減少傾向を示し、弘化3年には200石を割るようになる。この間、天保14年12月には、

(24) 文政12年6月「質物書上写」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）。二宮町史編さん委員会編『二宮町史』史料編Ⅱ 近世（二宮町、2005年）917～919頁。

(25) 天保6年12月「御尋ニ付奉申上候」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）。

(26) 天保4年6月「乍恐以書付奉申上候（酒造株願立ニ付家屋敷等書上）」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）。前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家の経営—本店を中心に—」428頁。

諸国酒造出造出稼の差止めが言い渡され、鷺巣村での出造りを一時中止したようである。⁽²⁷⁾ 造酒米高から見た酒造経営の規模としては、上ノ店と同程度のものであった。

4 恩名店・境店

恩名店は、下総国結城郡恩名村にあり、「山天」などとも称され、店名前は「天満屋与三郎」であった。

恩名店については、天保元年12月の「書付を以奉申上候」⁽²⁸⁾によれば、「株高三石五斗、酒造米高三百石」であったが、酒造制限による減石で、「造米高式百五拾石、外ニ五拾石ハ減石之分」となり、「田口五郎左衛門代官所 下総国結城郡恩名村、酒造人 与三郎」がその旨を届けている。その一連の書面の中で「造米高三百石、但文化三寅年〆書面之通造来り申候、右ハ私共村方酒造人御糺ニ付、書面之通奉書上候処相違無御座候、尤右之外造酒人無御座候」と恩名村の名主山川平八、組頭清七、百姓代卯兵衛が役人中へ申し出ており、恩名店が文化3年(1806)には酒造業を始めていたことがわかる。⁽²⁹⁾

ここでは、恩名店の文政10年から明治5年までの「造酒諸勘定目録」などの帳簿を用いて、その経営動向を見てみることにする。それを示したのが、表4である。天保5、8、11年と安政5年のデータが欠けているが、50年弱の動

(27) 天保14年12月「酒造出造出稼御差止被仰渡候御請書」(天保4年正月「酒造出造出稼御差止ニ付取調書上帳控」栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)。前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」210頁。

(28) 天保元年12月「書付を以奉申上候」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)。同様の内容をもつ天保元年12月の史料が、前掲『三和町史』資料編 近世、1031～1033頁)にも掲載されている。

(29) 天満屋儀右衛門が、すでに寛政8年(1796)8月から10か年季で、恩納村の山川又兵衛から酒造株ならびに酒蔵・酒造諸道具を借り受け、酒造業を始めていたようである。ここでは、最初の2年間は年に12両、残りの8年間は年に17両2分で借り受け、年季明け後は年に20両で何年も借り続けると約束していた(寛政8年8月「借受申酒蔵証文之事」三和町史編さん委員会編『三和町史』資料編 近世、三和町、1992年、1029～1030頁)。文化3年は、この年季明けの年にあたるものと思われる。

表 4 恩名店の資産額

年 代	資 産 額	元金	質 方 有 物	造 酒 米 高
文政10年 (1827)	818 両・永 63 文	330 両	220 両 3 分・146 貫 480 文	334 石 7 斗 5 升
文政11年 (1828)	1033 両 1 分・47 文	330 両	264 両 3 分 1 朱・99 貫 852 文	351 石 1 斗
文政12年 (1829)	1019 両 2 分・313 文	330 両	270 両 3 分・36 貫 970 文	293 石 6 斗
天保元年 (1830)	842 両 1 分 2 朱・585 文	330 両	312 両 1 分・1 貫 859 文	328 石 4 斗
天保 2 年 (1831)	934 両 3 分 2 朱・192 文	330 両	391 両 2 朱・36 貫 222 文	332 石 7 斗
天保 3 年 (1832)	1200 両 1 分・365 文	330 両	422 両 3 分 3 朱・14 貫 661 文	345 石 9 斗 9 升
天保 4 年 (1833)	958 両・567 文	330 両	323 両・2 貫 569 文	332 石 9 斗
天保 6 年 (1835)	1149 両 1 分 2 朱・572 文	330 両	374 両 2 分 1 朱・12 貫 722 文	283 石 4 斗 9 升
天保 7 年 (1836)	1270 両・746 文	330 両	524 両 1 分 2 朱・104 貫 324 文	207 石 1 斗 2 升
天保 9 年 (1838)	1605 両 1 分・1 貫 186 文	330 両	376 両・6 貫 468 文	266 石 1 斗 8 升
天保10年 (1839)	1622 両 3 朱・663 分	330 両	430 両 1 分・1 貫 142 文	171 石 8 升
天保12年 (1841)	1515 両 3 朱・666 文	330 両	361 両 2 朱・401 文	353 石 8 升
天保13年 (1842)	1684 両 1 分 2 朱・293 文	330 両	316 両 2 分 2 朱・656 文	461 石 7 斗 4 升
天保14年 (1843)	1526 両 1 分 3 朱・407 貫 859 文	330 両	269 両 1 分 2 朱・11 貫 535 文	285 石 6 斗 5 升
弘化元年 (1844)	1702 両・469 文	330 両	259 両 2 分 1 朱・6 貫 862 文	409 石 7 斗 5 升
弘化 2 年 (1845)	1808 両 1 分・300 文	330 両	324 両 3 分・1 貫 9 文	307 石 7 斗 5 升
弘化 3 年 (1846)	1813 両・1 貫 351 文	330 両	332 両 2 分・690 文	268 石 4 斗
弘化 4 年 (1847)	2088 両 2 分・734 文	330 両	358 両 3 分・18 貫 52 文	444 石 8 斗 9 升
嘉永元年 (1848)	2024 両 2 分 2 朱・832 文	330 両	427 両 2 分・104 文	456 石 2 斗
嘉永 2 年 (1849)	1990 両 2 分・429 文	330 両	407 両 3 分・18 貫 158 文	539 石 8 升
嘉永 3 年 (1850)	2515 両 2 分 2 朱・670 文	330 両	326 両 3 分・215 文	540 石 9 斗 6 升
嘉永 4 年 (1851)	2457 両・600 文	330 両	321 両 1 分 2 朱・16 貫 242 文	509 石 5 斗 8 升
嘉永 5 年 (1852)	2609 両 2 分 2 朱・452 文	330 両	312 両 3 分 2 朱・5 貫 690 文	675 石 1 斗 7 升
嘉永 6 年 (1853)	2677 両 2 分 2 朱・494 貫 191 文	330 両	342 両 2 分 2 朱・321 文	662 石 5 斗
安政元年 (1854)	2846 両 2 分 2 朱・211 文	330 両	294 両 2 朱・745 文	576 石 4 斗 8 升
安政 2 年 (1855)	2661 両 2 分 1 朱・217 文	330 両	275 両・1 貫 646 文	777 石 4 斗 1 升
安政 3 年 (1856)	2515 両 2 分 2 朱・268 文	330 両	219 両 3 分 2 朱・217 文	648 石 2 升
安政 4 年 (1857)	2802 両・219 文	330 両	209 両 2 分・714 文	755 石 9 斗 8 升
安政 6 年 (1859)	3478 両 2 分・492 文	330 両	297 両 2 分 2 朱・403 文	700 石 8 斗 2 升
万延元年 (1860)	3848 両 1 分 2 朱・565 文	330 両	292 両 2 朱・53 分	732 石 7 斗 1 升
文久元年 (1861)	3958 両・420 文	330 両	279 両 2 分 2 朱・786 文	555 石 5 斗
文久 2 年 (1862)	4036 両 3 分 2 朱・379 文	330 両	299 両 2 分 2 朱・36 文	618 石 4 斗 4 升
文久 3 年 (1863)	4011 両 1 分 1 朱・474 文	330 両	306 両 2 分・910 文	757 石 4 斗
元治元年 (1864)	4435 両 1 分・337 文	330 両	320 両 2 分 1 朱・382 文	652 石 8 斗
慶応元年 (1865)	5158 両 2 分 3 朱・827 貫 123 文	330 両	296 両 3 分・629 文	856 石 8 斗 7 升
慶応 2 年 (1866)	6988 両 2 分 3 朱・1547 貫 693 文	330 両	444 両 3 分・405 文	392 石 6 斗 9 升
慶応 3 年 (1867)	8287 両 1 分 3 朱・106 文	330 両	689 両 2 分・180 文	267 石 2 斗 6 升
明治元年 (1868)	8028 両 2 朱・858 貫 214 文	330 両	687 両 1 分 2 朱・440 文	210 石 4 斗 1 升
明治 2 年 (1869)	8117 両 3 分 1 朱・1004 貫 921 文	330 両	130 両	244 石
明治 3 年 (1870)	7602 両 3 分 3 朱・1053 貫 612 文	330 両	65 両 3 朱	103 石 9 斗 2 升
明治 4 年 (1871)	8341 両 3 朱・692 貫 676 文	330 両	62 両・650 文	291 石 1 斗 2 升 5 合
明治 5 年 (1872)	8470 両 1 分 1 朱・733 貫 329 文	330 両	61 両 1 分 2 朱・650 文	326 石 1 斗 7 升 5 合

(注) 各年の「酒醬油諸勘定目録」「諸勘定目録」「勘定帳」など(日野町史編さん室・栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)より作成。

向が明らかになる。表からも明らかなように、恩名店は酒造業と質屋業を営んでいた。

資産額をみると、文政10年には818両余であったが、同11年には1033両余、天保9年には1605両余、弘化4年には2088両余、安政6年には3478両余、慶応元年(1865)には5158両余、明治5年には8470両余と多少上下するが、順調に増加していった。特に、弘化期以降の増加が著しく、幕末期に経営規模が拡大していったことがうかがえる。本店や上ノ店で見られたような安政3年から4年にかけての大幅な落ち込みも恩名店では見られない。資産額も上ノ店とほぼ同じかやや上回る規模をもっており、幕末期には吉村儀兵衛家の主力店に育っていったことがうかがえる。

元金は、「当店元金」「本店元金」などとあり、文政10年から明治5年に至るまで330両で固定している。ただし、別に「久下田当借」「本店当借用」として、たとえば文政10年には159両3分2朱・72文、天保6年には167両1分2朱・369文、天保12年には319両3分・27貫492文、安政6年には628両3分2朱・43文、慶応元年には709両3朱・215文、明治4年には1009両3分2朱・371文が計上されている。

質方有物は、「質方有物」「質方かし」「質方有^メ」などとあり、文政10年には220両3分・146貫480文であったが、しだいに増加して天保7年に524両余に達する。その後は300両台を維持する。安政元年からは200両台に落ちるものの、慶応2年には444両余、同3年には689両2分・180文にまで急増する。しかし、明治2年以降は130両、同3年以降は60両台にまで低下し、質屋業を取りやめたようである。

造酒米高は、文政10年には334石7斗5升であり、その後300石台を維持するが、天保6～9年には200石台と減少し、同10年には171石8升到まで落ち込む。その後は増加傾向を辿り、天保13年には461石余、嘉永2年には539石余、安政2年には700石台を突破し、慶応元年には856石8斗7升到まで至る。慶応2年以降は低迷し、200～300石台で推移し、明治3年には103

表 5 境店の資産額

年 代	資 産 額	元 金	造酒米高
文久 2 年 (1862)	794 両・25 文	443 両 1 分・2 貫 789 文	202 石 1 斗 2 升
文久 3 年 (1863)	1139 両 2 分 1 朱・66 文	744 両 3 分・1 貫 437 文	272 石 7 斗 1 升
元治元年 (1864)	1895 両 2 分 3 朱・300 貫 700 文	500 両	350 石 7 斗 1 升
慶応 2 年 (1866)	4089 両 3 朱・465 貫 239 文	500 両	211 石 5 斗 3 升 5 合
慶応 3 年 (1867)	5296 両 3 分・604 貫 62 文	500 両	169 石 1 斗 2 升
明治元年 (1868)	5378 両 1 分 3 朱・1387 貫 949 文	500 両	233 石 8 斗 7 升
明治 2 年 (1869)	6025 両 1 分 3 朱・1408 貫 850 文	500 両	302 石 6 斗 3 升
明治 3 年 (1870)	6810 両 3 分 2 朱・1599 貫 140 文	500 両	156 石 9 斗 7 升
明治 4 年 (1871)	6097 両 1 分 2 朱・624 貫 202 文	500 両	222 石 4 斗 1 升
明治 5 年 (1872)	7364 両 1 分 3 朱・660 貫 887 文	500 両	222 石 4 斗 8 升

(注) 各年の「勘定目録」など(日野町史編さん室・栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)より作成。

石余にまで減少する。嘉永以降の増加によって造酒米高は、本店のそれに匹敵するものとなり、こうした酒造経営規模の拡大が、幕末期の恩名店の資産額の増加にもつながって行ったようである。

恩名店には、幕末期になると下総国猿島郡境河岸に恩名店の枝店と思われる境店を設けたようである。⁽³⁰⁾ 境河岸は、利根川中流左岸にあり、交通の要衝に位置した。境店は、「境河岸店」「一山天店」などとも称され、店名前は恩名店と同じく「天満屋与三郎」であった。こうした店名の類似性からも明らかのように、境店は恩名店から分かれた枝店のようである。

そこで、境店の年々の「勘定目録」などの帳簿類によって、文久 2 年～明治 5 年の 11 年間の経営データを示したのが表 5 である。ただし、慶応元年分はデータが欠けている。資産額は、文久 2 年には 764 両・25 文であったが、同 3 年には 1139 両余、元治元年には 1895 両、慶応 2 年には 4089 両余、明治 2 年には 6025 両余、同 5 年には 7364 両余と物価上昇があるとはいえ、急激に増加させ、恩名店に匹敵する規模となっている。⁽³¹⁾

(30) 境店については、境町の天満屋与三郎が、「私儀去安政七申年々丈右衛門酒造株借受相始候」とあるように、安政 7 年に下総国猿嶋郡境町の丈右衛門から酒造株(造酒米高 74 石 2 斗)を借り受け、酒造業を始めたとある(慶応元年 11 月「乍恐以書付奉願上候」境町史編さん委員会編『下総境の生活史』史料編 近世 I 河岸町の生活、境町、2000 年、339～340 頁)。

元金は、文久2～3年は「本店当用」「本店々当用」^ベとしてそれぞれ443両余と744両余となっているが、元治元年には500両が「久恩両店元金」^ベとあり、久下田店（本店）と恩名店から出資されていることがわかる。さらに、慶応2～3年には「本店元金」「本店」250両、「恩名店同」「恩名店」250両と、両店からの元金が区別して書き上げられ、明治2年からは「両店元金」「本店恩名」^ベ元金として500両が一括して計上されている。こうした点からも境店が恩名店の枝店としてとらえられていたことが明らかであり、また帳面も「両店」で合冊されている年が多く見られた。

造酒米高は、ほぼ200～300石であり、上ノ店よりもやや小さな規模であった。したがって、境店は境町の河岸の発展に応じて設けられた店であり、恩名店の枝店としての性格をもち、恩名店のように質屋業は営んでいなかった。

5 柿岡店

柿岡店は、常陸国新治郡柿岡村にあり、「柿岡蔵」とも呼ばれ、店名前は「天満屋三郎兵衛」であった。そこで、天保6年から文久2年までの経営動向をかなり欠年があるが、柿岡店の「造酒勘定目録」「勘定目録」などの勘定帳を用いて示したのが、表6である。

この表によれば、資産額は天保6年の201両2朱・255文であるが、天保10年には597両余、弘化元年には683両余、嘉永元年には867両余、同4年には1167両余と順調に増加する。しかし、安政4年には281両3分2朱・124貫960文と急減する。これは、本店や上ノ店でも見られた安政3年から4年への会計上の処理などが想定できるかも知れないが、嘉永5年～安政3年のデータが欠けているので判断がつかない。その後は、250～350両で推移する。

元金は、天保6年には160両3分3朱・2貫179文とあるが、これは「久下

✓ (31) ただし、資産額の中に、慶応2年には「右（恩名）店当用金」2546両3分・1貫469文、明治2年には「恩名店当用金」3438両3分3朱・72文、明治5年には「恩名店当用金」4067両2朱・1貫446文が含まれており（各年の「勘定目録」日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）、金額が大きく見えるのかも知れない。

表 6 柿岡店の資産額

年 代	資 産 額	元 金	質 方 有 物	造酒米高
天保 6 年 (1835)	201 両 2 朱・255 文	160 両 3 分 3 朱・2 貫 179 文		94 石 7 斗 8 升
天保 7 年 (1836)	174 両・134 文	97 両 2 分 2 朱・4 貫 278 文		94 石 7 斗 8 升
天保 9 年 (1838)	454 両 3 分 3 朱・351 文	80 両	140 両 3 分 3 朱・181 貫 192 文	88 石 1 斗 2 升
天保10年 (1839)	597 両・95 文	80 両	240 両 2 分 1 朱・225 貫 580 文	72 石 3 斗 4 升
弘化元年 (1844)	683 両 3 分 3 朱・52 文	80 両	119 両 3 朱・334 貫 192 文	132 石 1 斗 8 升
弘化 2 年 (1845)	722 両 3 分 2 朱・275 文	80 両	122 両 2 朱・319 貫 640 文	85 石
弘化 3 年 (1846)	762 両 2 朱・810 文	80 両	156 両 1 分 2 朱・454 貫 854 文	56 石 7 斗
弘化 4 年 (1847)	768 両・642 文	80 両	173 両 1 分 3 朱・356 貫 102 文	57 石 8 斗 6 升
嘉永元年 (1848)	867 両 2 分 1 朱・631 文	80 両	190 両 2 分 1 朱・350 貫 122 文	104 石 3 斗
嘉永 2 年 (1849)	957 両 1 分 2 朱・441 文	80 両	226 両 1 分 2 朱・341 貫 666 文	137 石 1 斗
嘉永 3 年 (1850)	1093 両 3 分 2 朱・443 文	80 両	238 両 1 分 2 朱・370 貫 561 文	123 石 5 斗 8 升
嘉永 4 年 (1851)	1167 両 2 朱・259 文	80 両	234 両 2 朱・331 貫 567 文	128 石 2 斗 3 升
安政 4 年 (1857)	281 両 3 分 2 朱・124 貫 960 文	15 両 3 分 2 朱・7 貫 80 文	8 両 2 分 3 朱・12 貫 167 文	115 石 2 斗 4 升
安政 5 年 (1858)	251 両 2 分 3 朱・102 貫 715 文	15 両 3 分 2 朱・7 貫 80 文	8 両 1 分・209 文	96 石 4 斗 1 升
安政 6 年 (1859)	294 両 3 朱・65 文	15 両 3 分 2 朱・7 貫 80 文	11 両・22 貫 768 文	116 石 4 斗
万延元年 (1860)	324 両 1 分 3 朱・224 文	15 両 3 分 2 朱・7 貫 80 文	16 両 1 分 1 朱・50 貫 659 文	86 石 7 斗 7 升 5 合
文久 2 年 (1862)	345 両 3 分 3 朱・2 貫 370 文	17 両 3 分 2 朱・703 文	8 両 3 朱・27 貫 830 文	55 石 4 斗 8 升

(注) 天明 2 年 12 月「万目録」(日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書)より作成。

田本店借用」とあるもので、同 7 年も「本店かり」の金額である。天保 9 年～嘉永 4 年の 80 両は「元金」であり、固定されている。これとは別に、たとえば天保 9 年には 121 両 2 分 2 朱・4 貫 270 文の「本店借用」、同 10 年には 200 両 2 分 1 朱・9 貫 525 文の「本店当借」、嘉永 3 年には 410 両 1 分 2 朱・722 文の「本店借用」がある。安政 4 年～万延元年の 15 両 3 分 2 朱・7 貫 80 文は「本店質物金借用」とあり、別にたとえば安政 4 年には 120 両の「本店当借」、万延元年には 145 両 3 朱・3 貫 409 文の「本店当借」が見られる。文久 2 年の 17 両 3 分 2 朱・703 文は「酉元金」であり、別に 162 両 2 朱・93 文の「本店当借」がある。これらの元金からも、柿岡店は恩名店の 4 分の 1 程度の小規模なものであったことがわかる。

質方有物は、「質方有物」「質方かし」「有質ゞ」などと記され、天保 9 年には 140 両 3 分 3 朱・181 貫 192 文であり、同 10 年には 240 両余に増加する。しかし、弘化元年には 119 両余に減少するが、その後ゆっくりと増加し、嘉永 3 年には 238 両余にまで回復する。ところが、安政 4 年には資産額や元金などと同様に 8 両 2 分 3 朱・121 貫 167 文と激減し、文久 2 年までほぼその水準のままである。

造酒米高は、天保6年には94石7斗8升であり、弘化3～4年には50石台にまで減少するが、ほぼ100石前後を上下している。ただし、文久2年には55石余まで再度減少する。最大の造酒米高が嘉永2年の137石余であり、造酒米高の規模としては、吉村儀兵衛家の出店の中で最も小さく、多くの出店の3分の1以下であった。

6 横堀店

横堀店は、下野国都賀郡横堀村にあり、「横堀蔵」「井筒儀」などと称され、店名前は「天満屋儀三郎」であった。

横堀店については、開業にあたっての事情が明らかになる次のような史料がある。

為取替申借蔵証文事⁽³²⁾

一此度貴殿所持之造酒蔵酒株地面土蔵壺ヶ所空地并諸道具、別紙帳面之通当亥八月より来申ノ八月迄中拾ヶ年季ニ相定借請之、我等召遣儀三郎差遣シ、出店商売稼仕候所実正也、右蔵鋪賃銀之儀者前五ヶ年者壺ヶ年ニ金三両ニ相定、後五ヶ年者壺ヶ年ニ金八両ニ相定候上ハ、年々八月卅日限り無相違相渡可申候、然上者御領主様ニ相拘り候儀者不及申御村方諸役等之儀者、貴殿方ニ而御勤可被成候筈議定仕候、尚又商売相応ニ御坐候ハ、縦令何ヶ年成共、此証文右定之賃銀を以猶又借請可申筈議定仕候、尤不商売ニ候ハ、何時ニ而も相止可申候、万々一火難焼失之儀者貴殿御損毛ニ御坐候事

一借請候造酒蔵当時及大破罷在候而、普請方新規同様之儀ニ御坐候間、追々我等方ニ而可致候筈議定仕候、猶平生修覆之儀者時之宜鋪ニ応し取斗候儀者、我等勝手次第ニ御坐候得者、後日貴殿江御返シ申候節者、縦令模様者変候共、有形之分新古大小之無差別其儘ニ而御渡可申候、其外我等拵候普請諸道具之儀者我等持ニ御坐候得者、後年引退候節勝手次第可仕

(32) 文政10年8月「為取替申借蔵証文事」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）。

候事

一諸方取引仕候ニ付、売子貸并貸金之儀者何れニ相對欠合仕候共、勝手次第御坐候事

一造酒冥加永之儀者、我等方より御上納可仕候事

一御公儀様御法度之儀者不及申、其外御村方御掟堅相慎可申候事

一宗旨之儀者代々禪宗当町芳全寺旦那紛無御坐候、則寺請証文請人方江取置候間、御入用次第差出可申候事

右之通相定候上者少茂相違無御坐候、若違乱ケ間鋪儀申者御坐候ハ、加印之者何方迄茂罷出急度埒明、貴殿江御苦難相掛申間鋪候、為後日為取替申借請証文依而如件

文政十年亥八月

御代官伊奈友之助支配所

野州芳賀郡谷田貝町

借受人 儀右衛門㊤

同所請人 佐次兵衛㊤

同所証人 伝右衛門㊤

横堀村

七郎兵衛殿

すなわち、谷田貝の儀右衛門が、横堀村の七郎兵衛から酒株とともに造酒蔵と諸道具を文政 10 年 8 月から 10 か年間にわたり借り入れ、儀三郎を派遣して酒造業を行なおうとした。借請賃は 10 年間のうち前 5 年は年 3 両、後 5 年は年 8 両とし、順調であればその後も借り請けるという取り決めであった。このようにして、横堀店は文政 10 年 8 月に借り蔵で営業を開始することとなった。

そこで、横堀店の「酒造勘定目録」「勘定改」などの勘定帳を用いて、この開店時から天保 13 年までの 15 年間の経営動向を示したのが、表 7 である。文政 11 年から始まっているが、これは他店の勘定と同様に文政 10 年の秋から同

(33) この時に譲り渡された諸道具の目録があり、そこには 6 尺 5 寸桶 3 本、6 尺桶 2 本、4 尺桶 5 本など 74 点の道具が書上げられている（文政 10 年 8 月「酒造蔵諸道具目録帳」栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）。

表7 横堀店の資産額

年 代	資 産 額	元 金	質 方 有 物	造酒米高
文政11年 (1828)	227 両 3 朱・306 文	277 両 2 朱・113 文	8 両 3 分・2 貫 900 文	189 石
文政12年 (1829)	301 両 1 朱・657 文	321 両 3 分 3 朱・191 文	25 両 2 朱・17 貫 346 文	173 石 9 斗 3 升
天保元年 (1830)	384 両 1 朱・290 文	330 両 1 分 3 朱・903 文	33 両 2 朱・22 貫 320 文	248 石 9 升 5 合
天保2年 (1831)	416 両 1 分 1 朱・264 文	316 両 2 分・330 文	36 両 2 分 2 朱・28 貫 264 文	254 石 9 斗
天保3年 (1832)	451 両 1 分 3 朱・279 文	286 両 3 分 2 朱・108 文	36 両 2 分・23 貫 778 文	321 石 8 斗 6 升
天保4年 (1833)	651 両 1 分 2 朱・241 文	417 両 1 分 2 朱・1 貫 243 文	18 両 1 分・11 貫 910 文	285 石 1 斗 8 升
天保6年 (1835)	803 両 1 分 3 朱・341 文	369 両 3 分 3 朱・23 文	17 両 1 分 3 朱・7 貫 242 文	227 石 6 斗 4 升
天保7年 (1836)	955 両 3 分 1 朱・65 文	415 両 2 朱・4 貫 372 文	10 両 3 分 3 朱・8 貫 189 文	224 石 2 斗 5 升 5 合
天保10年 (1839)	1038 両 2 朱・7 文	454 両 1 分 2 朱・328 文	24 両 3 朱・12 貫 862 文	72 石 8 斗 2 升 4 合
天保12年 (1841)	1199 両 2 朱・829 文	300 両	43 両 1 分・14 貫 708 文	214 石 6 斗 4 升
天保13年 (1842)	1382 両 1 分 3 朱・215 文	300 両	27 両 2 朱・16 貫 690 文	167 石 5 斗 3 升 5 合

(注) 各年の「酒造勘定目録」「勘定改」など(日野町史編さん室・栃木県立文書寄託古村儀兵衛家文書)により作成。

11年の秋までの勘定を示したものであり、この表からは開店当初からの状況が明らかになる。取り決めでは10年間であったが、さらに5年間延長されたようである。

この表によれば、資産額は文政11年には227両3朱・306文であり、天保元年には384両余、同4年には651両余、同6年には803両、同10年には1038両と増加し、同13年には1382両1分3朱・215文にまで達し、順調に経営がなされていたことがわかる。

元金は、天保10年までは「本店〆入」「本店入ル」「本店入金ヱ」とあり、文政11年の277両2朱・113文からほぼ毎年増加し、天保10年には454両余に至る。天保12～13年は「元金」として300両に固定され、ほかに「本店当借」として同12年には363両余、同13年には474両余が計上されている。

質方有物は、「質方かし」「質方有物」と記され、10～40両前後を上下しているが、いずれにしても50両以下のきわめて小規模なものであった。造酒米高は、文政11年の189石から天保3年の321石余まで増加するが、それ以降は減少する。天保10年には72石余にまで落ち込むものの、その後は200石前後まで戻している。造酒米高では、上ノ店や恩名店よりも小さく、出店の中でもやや規模の小さな店と思われる。

7 下館店

下館店は、常陸国真壁郡下館大町にあり、「下館店」「中村蔵」などと称され、店名前は「中村伊右衛門」であった。下館店の設立の経緯などについては、現在のところほとんど明らかでないが、他店と同様に毎年の「酒諸勘定目録」が文政2～5年分残されている。

そこで、4年間という短期間であるが、その経営動向を表8によって簡単に見てみよう。資産額は、文政2年には670両・1貫95文であり、同5年の864両1分2朱・511文に至るまでゆっくりと増加している。元金は、「元金」「当店元金」とあり、500両で固定しているが、別に「本店分かり」としてたとえば文政2年には83両14貫208文、同5年には231両47貫178文が計上されている。

質方有物は、文政2年には202両2分2朱・189貫758文であり、ほぼ毎年200～230両余を維持している。質方有物の額からすれば、鷺巣店よりも多く、少し時期がずれるが、ほぼ上ノ店や恩名店などと同じ規模をもつことがわかる。造酒米高は、文政2年には388石6斗3升であり、この間370～490石で推移し、鷺巣店とほぼ同じ規模をもっていた。

おわりに

最後に、本店（天満屋儀右衛門）を含め、下妻（天満屋与三右衛門）・上ノ店（天満屋儀兵衛）・鷺巣（天満屋惣右衛門）・恩名（天満屋与三郎）・境（天満屋与三郎）・柿岡（天満屋三郎兵衛）・横堀（天満屋儀三郎）・下館（中村伊右衛門）の出店を比較し

表8 下館店の資産額

年 代	資 産 額	元金	質 方 有 物	造酒米高
文政2年(1819)	670両・1貫95文	500両	202両2分2朱・189貫758文	388石6斗3升
文政3年(1820)	727両2分2朱・555文	500両	200両・181貫232文	486石1斗1升
文政4年(1821)	833両1分2朱・78文	500両	229両3分2朱・186貫837文	396石4斗9升
文政5年(1822)	864両1分2朱・511文	500両	229両1分2朱・226貫657文	371石1斗

(注) 各年の「酒諸勘定目録」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）より作成。

ながら、吉村儀兵衛家の各店の性格をまとめてみることにしよう。

吉村儀兵衛家は、寛延2年に久下田店（本店）を設けて、16年後の明和2年には初めての出店と思われる下妻店を開設した。上ノ店は、寛政5年に新規株を入手して久下田上町に設けた久下田店の枝店的存在であった。文政期になると、鷺巣店・下館店・恩名店・横堀店の存在が確認され、天保期には柿岡店、文久期には恩名店の枝店として境店が設けられたようである。こうして、最盛期には本店の周辺地域である下野国・常陸国に5～6店舗の出店を有するまでに至るのであるが、幕末・維新时期になると本店と上ノ店を残し、他店は借り蔵でもあったためしだいに姿を消してしまうことになるのである。

これらの出店では、本店と同様に酒造業を中心に事業を展開していたのであるが、上ノ店では醤油醸造業も行なわれていた。質屋業も本店と同様に上ノ店、鷺巣店、恩名店、横堀店、下館店において見られたが、質方有物で各出店を比較すると、上ノ店は本店の1～2割、鷺巣店・恩名店は2～3割、横堀店は0.1～0.2割、下館店は1～2割の規模であった。造酒米高では、下妻店は本店の7～8割、上ノ店・鷺巣店は5割、恩名店は5～8割、境店は3～4割、柿岡店は2割、横堀店は2～3割、下館店は4～5割の規模であった。

各出店について資産額などの規模や店としての特徴を見ると、下妻店は、古くから開設された店であり、本店よりやや小さめの店であった。上ノ店は、久下田の本店の枝店として設けられ、醤油醸造業も営み、「天満屋儀兵衛」の店名前から明らかなように本店と密接な関係を持ち、長期にわたって本店と補完的に存続した店であった。資産額から見れば、本店の1～2割の規模であり、出店の中では中核的な店であった。鷺巣店は、質屋業も行ない、資産額では上ノ店とほぼ同規模の店であった。恩名店は、質屋業も営み、資産額も上ノ店とほぼ同じかやや上回る規模をもっており、幕末期には吉村儀兵衛家の主力店に育っていった。恩名店の枝店として出てきたのが境店であり、同店は境河岸の発展に伴い設置されたようで、恩名店とともに急速に発展した新興店であった。柿岡店は、恩名店の4分の1程度の小規模な店で、質屋業も行なっていた

が、造酒米高も出店の中で最も小さく、多くの出店の3分の1以下の規模であった。横堀店は、質屋業も営んでいたようであるが、きわめて小規模なものであり、酒造業も上ノ店や恩名店よりも小さく、出店の中でもやや規模の小さな店であった。下館店は、質屋業も営んでおり、短期間であるが鷺巣店などと同規模の店であった。

資産額でも、各出店は本店の2割にも満たない規模であったが、幕末期には恩名店が大きくなり、本店が安政4年に3分の1に急減することもあるが、半分を超える規模にまで達した。また、各店の固定した元金が、各店の評価をある程度示すものと考え、年代が多少ずれるところもあるが、上ノ店が300両（600両）、鷺巣店が130両（300両）、恩名店が330両、境店が500両（250両）、柿岡店が80両、横堀店が300両とあることからある程度店の規模が理解できるであろう。

〔付記〕

本稿作成にあたっては、史料所蔵者である吉村儀兵衛家ならびに寄託先である日野町史編さん室、栃木県立文書館には、大変お世話になった。ここに深く感謝するしだいである。なお本稿は、平成20年度～平成22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「近江商人の経営と雇用形態に関する研究」による研究成果の一部である。